

## 救うために来られたキリスト (不信仰の危険性を訴える)

ヨハネ福音書12:44-50

【新改訳 2017】

- 12:44 イエスは大きな声でこう言われた。「わたしを信じる者は、わたしではなく、わたしを遣わされた方を信じるのです。
- 12:45 また、わたしを見る者は、わたしを遣わされた方を見るのです。
- 12:46 わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれも闇の中にとどまることのないようにするためです。
- 12:47 だれか、わたしのことばを聞いてそれを守らない者がいても、わたしはその人をさばきません。わたしが来たのは世をさばくためではなく、世を救うためだからです。
- 12:48 わたしを拒み、わたしのことばを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことば、それが、終わりの日にその人をさばきます。
- 12:49 わたしは自分から話したのではなく、わたしを遣わされた父ご自身が、言うべきこと、話すべきことを、わたしにお命じになったのだからです。
- 12:50 わたしは、父の命令が永遠のいのちであることを知っています。ですから、わたしが話していることは、父がわたしに言われたとおりを、そのまま話しているのです。」

### 【祈りながら考えよう】

- (1) 44-45節での主イエスの発言によって、主は父なる神と一体であることがわかりますか。
- (2) 47節の「わたしが来たのは世をさばくためではなく、世を救うためだからです」とのみことばは、主が今後も永遠にさばかないことを意味していますか。
- (3) 50節の「父の命令が永遠のいのちである」とはどういう意味ですか。

### 【解 説】

#### (1) 父なる神と一体である

35節で主イエスは、やがて光が去り闇が襲うことを示唆されたが、今や、まことの光であるイエスは神殿を去って人々の前から身を隠された(36b)。再び民衆の前に姿を現すのは、逮捕されて裁判を受ける時である。

今日のこの箇所(12:44-50)は、ユダヤ人に対する主の公の教えのすべてをまとめるものである。これまでの教えが要約される中で、イエスは再び声を大にして、不信仰の危険性を訴えておられる。

イエスは大きな声でこう言われた。  
「わたしを信じる者は、わたしではなく、わたしを遣わされた方を信じるのです。  
また、わたしを見る者は、わたしを遣わされた方を見るのです。(44-45節)

44節を意識するとこのようになる。

「わたしを信じる者は、実はわたしだけではなく、わたしを遣わされた御父をも信じているのである」  
ここで、主はご自身が父なる神と完全に一体であることを改めて教えられた。

私たちは、本当の神を、父なる神を、この肉眼で見ることにはできない(Ⅰテモテ6:16)。霊であるゆえに目に見えない。私たち人間は、このような弱さを持っていることを神様はご存じで、私たちに分かるように、御子を人間の姿をとらせてこの世に遣わされた。

だから、私たちは福音書に記されている御子イエス・キリストに神の御姿を見ることが出来る。主は言われたのは、「わたしを見た者は、ただわたしを見たのではなく、わたしを通して、またわたしによって、わたしを遣わされた方を見たのです。なぜなら、わたしたちは1つであって分割できないからです」ということである。

主を信頼する者は、御子だけを信頼しているのではなく、父なる神をも信頼していることがわかると、主は教えられ

た。要するに、罪人を救うために遣わされた御子を信頼することは、救いのために主を遣わされた父なる神をも信頼することなのである。御子と御父は三位一体の異なる位格であるが、両者を分割することはできない。

#### (2) 世の光であるキリスト

わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれも闇の中にとどまることのないようにするためです。(46節)

このみことばによって、主はもう一度、主がこの世に来られた偉大な目的を明らかにされた。光という比喩的表現を用いて、ご自身を太陽になぞられておられる。

「わたしは暗黒と罪に満ちているこの世に、人類に対するいのち、平安、きよさ、幸福の源また中心として来ました。それゆえ、わたしを受け入れ、信じる者は誰でも、闇の中から救い出され、豊かな光の中を歩むのです。」

また「わたしは太陽が天空に上るように、この世の上に上りました。わたしを信じたいと思う者が、霊的暗闇から救い出され、霊的いのちの光の中を歩むことができるようにするためです。」

光であるイエス・キリストがこの世に来られたことによって、私たちは道を踏み外すことなく、正しい目的地に向かって歩いて行くことができるようになった。

#### (3) 世を救うために来た

そのイエス・キリストが二千年前にこの世に来られたのは、「救い主」としてであった。主はこう言っておられる。

「だれか、わたしのことばを聞いてそれを守らない者がいても、わたしはその人をさばきません。わたしが来たのは世をさばくためではなく、世を救うためだからです。」

「わたしはその人をさばきません」というのは、「今はさばきません」という意味である。主は私たちを救うために天からこの世に来られたからである。メシアは彼の敵をさばき、復讐を行い、打ち砕き、罰するためにのみ来るという、ユダヤ人の誤った考えを正すためであった。この誤りは、来るべき再臨とさばきに対する誤解から生じた。

主は初臨において、さばき主としてではなく、救い主として、刑罰を与えるためではなく、あわれみを与えるために来られた。主は世界のすべての人に、救いにあずかる機会を与えるために来られた。それは、世界中の誰でも救われることができるためであった。

メシアなる主は、どういうふうにして私たちに救ってくださるのか。それは、私たちのすべての罪を背負い、私たちが受けなければならない刑罰を、私たちに代わって十字架で受けてくださることによってである。つまり、身代わりの贖いの死によってなのである。

だから、私たちが信じさえすれば罪の赦しが与えられる救いの土台をそこに据えてくださったわけである。そして、主は私たちが自発的にこの神の恵み深い救いを受けるようにと待っていてくださる。

#### (4) いつまで待っていてくださるのか

それでは、主はいつまで私たちに待っていてくださるのか。永遠にか。そうではない。この世の終わりまでである。主イエス・キリストが再び来られる時は、この世界をさばくために来られる。その時、主は裁きを行われる。

すべての人はこの裁きによって滅んでしまわなければならないはずなのであるが、キリストの救いを受けた人だけは、それから逃れることができる。

しかしそれを拒み、受け入れない人は、最後に裁かれなければならない。それは、主が何回も恵み深い救いについて語られたにもかかわらず、それを受け入れなかったからである。次のように言われている通りである。

「わたしを拒み、わたしのことばを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことば、それが、終わりの日にその人をさばきます。」(48節)

#### (5) 父なる神と御子との一体性

主は、最後にもう一度、父なる神と御子イエス・キリストとの一体性について、はっきりと言明された。

「わたしは自分から話したのではなく、わたしを遣わされた父ご自身が、言うべきこと、話すべきことを、わたしにお命じになったのだからです。」(49節)

主がこのように言われたこと背景には、ユダヤ人たちが、自分たちと同じ人間にすぎないイエスの言葉と考えていたものが、決してそうではなく、天におられる父なる神の御心にほかならないことを悟らせるためであった。

私たちは、福音書に記されている主イエス・キリストに、神を見ているだろうか。主イエス・キリストを神とは区別してはいないだろうか。どんなに主イエス・キリストが偉大であっても、神とは一応別であると考えてはいないだろうか。もしもそうであるとしたら、主が地上を歩まれた頃のユダヤ人とほとんど変わりが無い。主イエス・キリストを受け入れる人は、神を受け入れる人である。そして主イエス・キリストを拒む人は、神を拒む人なのである。

#### (6) 父の命令が永遠のいのちである

わたしは、父の命令が永遠のいのちであることを知っています。ですから、わたしが話していることは、父がわたしに言われたとおりを、そのまま話しているのです。(50節)

50節の「永遠のいのち」(ζωή)という言葉には冠詞がない。それは、永遠のいのちそのものではなく、永遠に長続きする、永遠に価値が消えない、永遠に力がある、という「父の命令」の性格、働きについて語っている。

御父が御子に語るように命令されたみことばには、それを信じる者に、永遠のいのちを得させる信仰を与える力がある。だから、その価値あるみことばを、主イエスは、御父に命じられるまま語ってくださった。

